

## 三保周辺のハマユウの植生分布

久保田 正・佐藤 武・前田秀太郎

ハマユウ（浜木綿）は、ヒガンバナ科ハマオモト属に属し、白い花を咲かせる夏の風物詩として昔から知られています。正式にはハマオモト (*Crinum asiaticum* Linne var. *japonicum* Baker) と言い、この名前は葉がオモト（万年青）に似ているので付けられた名前です。一般的にはハマユウの呼び名が別名として有名です。以下本報ではハマユウと呼びます（図1・2）。

このハマユウは、万葉集の歌人から愛され和歌に詠まれています。柿本人麻呂（かきのもとひとまる）は、「み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思えど直に逢わぬかも」と詠んでいます。その意味は、（熊野の浦の浜木綿が幾重にも重なり合っているように、心では思っているけれど、じかには逢えない）と切ない気持ち伝わってきます。みは接頭語です。

現在、本州の南を流れる黒潮の影響を受けている海岸に自生しているハマユウは、多くの自治体ではそれぞれの市町村の花に指定され、馴染みのある花です。因みに宮崎県の県花を初めとして全国では8市（7県）、8町（6県）、1村（1県）で合計17のそれぞれの自治体の花として街のシンボルとなっています。

ハマオモト属の種類数は、世界中から約60～180種以上が知られ（多くは100種以上と表記）、亜熱帯から熱帯地方の海岸に広く分布しています。国内では福岡県内の海岸に自生している本種は、天然記念物に指定されています。

また、自生している分布の北限地をつないだ線は、境界線と見做してCrinum Lineと呼んでいます。この線は、年平均気温ほぼ15℃の等温線上に相当しています。日本の分布の北限は、神奈川県横須賀市の天神島とされています。

ここで扱っている三保周辺に生育しているハマユウは、種子が海岸に流れ着いた後発芽して



図1. 群生するハマユウ  
(2001年7月20日撮影)



図2. ハマユウの花  
(2015年8月18日19時撮影)  
夕方から咲き始め夜中に満開となる

自生したのでは無く、人が他の地域から持ち帰り人工的に撒いて生育したものと考えられます。三保の海岸は、流れは西から三保の先端の方向に流れ、急深で波打ち際は小石や砂利であり、とても植物が育つような条件にはないのです。コルク質の種子は、水に浮いて遠くへ運ばれ、漂着場所で発芽します（図3）。

本報文は、2002（平成14）年夏季を中心として三保地区から旧清水市内に至るまでハマユウがどこに生育しているかを目視観察した結果です（図4）。また、静岡県中部の1979～

1983（昭和54～58）年の年平均気温の15℃線は、安倍川付近までは海岸線と並行しており、特に16℃以上は三保地区が含まれています。この付近のハマユウは、自生ではないけれど、上述の15℃のクリナム線の付近にあると考えられます。特に多く生育しているのは三保地区や旧清水市の海岸に近い所に多い傾向にあります（図5）。この地域は、冬季に気温の低い日が続くと場所により外側にある葉が寒さで枯れてしまうこともあるので生育にはかなり厳しい環境下にあると考えられます。

近年地球規模で気温の上昇が問題視されていますが、本種の植生分布の記録を残すことは有意義と思われる。将来気温の上昇に伴い、クリナム線の北上と共に本種の分布も拡大すると考えられます。その時にはこの植生分布が基礎資料になることを期待します。



図3. 鉢植えのハマユウの種子の若葉  
(佐藤 武郎の庭)

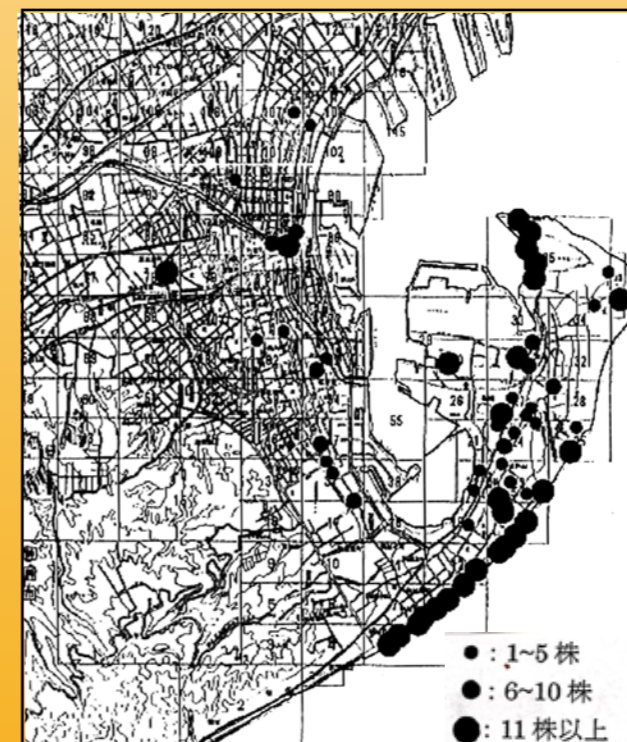


図4. 三保周辺のハマユウの植生分布  
(国土地理院発行の地図に作図)

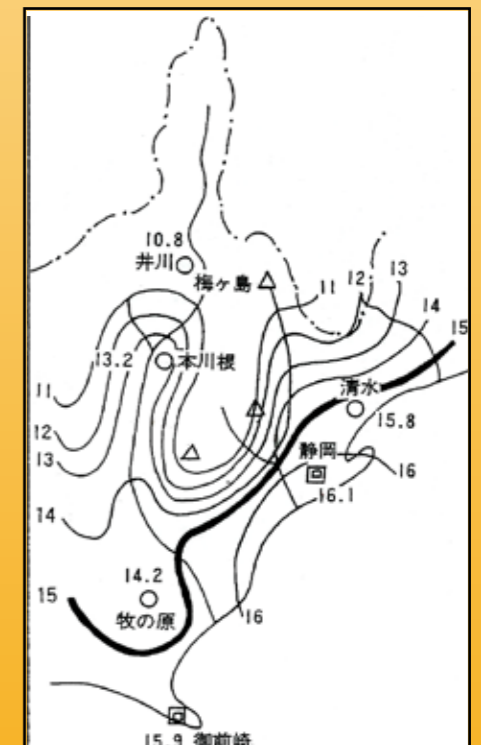


図5. 静岡県中部の年平均気温の等温線  
(1979～1983年の平均)  
杉山（1987）より引用